第21回ピースボート「旅と平和」エッセイ大賞　大賞受賞作品

## 生きる。～あの日の決意からの旅～／田代明衣さん（20歳）

私が高校生になった初めての夏、青い空と黄色いひまわり畑の広がる国、ウクライナに移住することになった。散歩をすると、どこからか聞こえる愉快な音楽や、焼きたてのパンの香り、そして読めない看板。新しいことの連続で胸が高鳴った。

わからない世界の楽しさ。そんな感覚を、私はどこかで求めていたのだと思う。音楽を聴きながらゆっくりとコーヒーを楽しめるカフェを開いたらどうだろうか。ドニエプル川沿いの公園を歩きながらよく考えていた。

しかし、その半年後のある夜、突然「帰国することになったよ」と家族から告げられた。私は訳も分からないまま、リュックサックに数日分の着替えを詰めて飛行機に乗り込んだ。きっと数週間でまた帰れる。そう思いながら、ただ連絡を待つことしかできなかった。

2022年2月24日。テレビで侵攻開始のニュースを知り、私は言葉を失った。あの街は封鎖され、多くの戦車が走り、日常は一変していた。現地に住む友人や先生の安否が心配だった。しかし、私はただの高校生で、できることはほとんどなかった。

このままで良いのだろうかと感じた私は、高校の文化祭で培った動画編集のスキルを活かし、友人に向けて、ウクライナの魅力を伝える動画の発信を始めた。ウクライナがどれほど素敵な街だったか、そして今何が起きているのかに関心を持ってもらいたい。その一心だった。そんな中、日本の高校生が街頭で署名を集め、平和を訴える姿を知った。その瞬間、私の中で何かが変わった。自分も行動すると決心し、春から平和活動に参加した。

その後、福岡県の平和活動メンバーとして活動を続け、2年目には第26代福岡県高校生平和大使に選出された。署名活動では、一筆ずつ街の人々の思いを集め、全国の高校生平和大使と共に約62万5000人の署名をジュネーブの国連欧州本部へ届ける機会を得た。さらに私たちは、その思いを直接伝えるスピーチの場にも立つことになった。どんな思いを1分間に込めようか。私はウクライナで出会った友人、そしてこれまで出会った被ばく者の方々やそのご家族、街頭で署名を書いてくれた町の人の顔を思い浮かべた。英語に自信がなかったが、飾らず、率直に感じたことを伝えようと心に決めた。

国連軍縮部ジュネーブ事務所の所長であるメラニー・レジンバル氏を目の前に、スピー

チ当日、私は当たり前の日常が壊される恐怖と今も苦しむ友人たちを救いたいという思いを訴えた。すると、涙ながらに、「ありがとう」と繰り返し、署名を受け取ってくれた。

しかし、訪問の最後に投げかけられた、「メッセージを受け取る人の気持ちになったことがありますか」という問いが、私の価値観を大きく揺さぶった。私はこれまで、自分が正しいと信じたことを発信するのに必死だった。そのため、相手がどのような背景を持ち、受け取るのかを十分に考えていなかった。また、アメリカという国について十分に理解しないまま、日本で聞いた被ばく体験への共感だけをもとに、学生や地域の人に発信していた。自分の主観や感情だけで「平和」を語っていたことに気づき、自分の視野の狭さを痛感した。

ジュネーブから帰ってきて、私は二つのことを決心した。

一つは、相手の気持ちや背景を十分に理解した上で講演をするために、発信する相手について誰よりも興味を持つこと。もう一つは、異なる価値観の中に飛び込み、アメリカの学生と議論して、自ら対話をすることだ。

一つ目について、帰国後、初めての講演会では、彼らの地場産業でもある農業について調べ尽くした。酸味と甘さのバランスを兼ね備えたいちごのブランド、夏と冬の寒暖差を生かした稲作、彼らがどのような気持ちで農業と向き合い、美味しい食材を私たちに届けているのか学んだ。講演会では、彼らの農業の話から始め、食と平和がどう結びつくのかを、できるだけわかりやすく説明した。「この町についても調べてくれて嬉しいよ、すごく勉強になった」と言ってもらったとき、相手の気持ちに寄り添い、発信する意義を深く感じた。

二つ目について、大学進学後は、法や国際政治を学びながら、海外の学生と議論する機会に挑戦した。春にスタンフォード大学で現地の学生と１週間過ごすというプログラムでは、学生たちが自分の意見を持ち、積極的に議論をする姿に圧倒された。世界各国から学生が集まる寮で、ルームホストは夜遅くまで、アメリカの政治について白熱した議論を交わしていた。

「あなたは今の日本についてどう思うの」と、ルームホストに問われたとき、私は、自分が意見を持てていないことに気づいた。ロースクールの授業でも、教授が質問を投げかけると、学生が一斉に手を挙げ、自分の意見を発表する。それを相手と議論することで、また自分の考えに磨きをかける。その環境の中で、対話とは意見を持ち、ぶつかり合うことで始まるのだと学んだ。アメリカという国への印象も大きく変わった。アメリカは、自由で躍動感のある国だ。「私もアメリカの人ともっと議論できるようになり

たい」と、そのような未知の世界に、再び胸が高鳴った。

その夏には、1934 年に日米両国が相互理解を深めるために発足した日米学生会議の国際政治分科会の選考に合格し、３週間、アメリカから来た学生と衣食住を共にしながら、京都、大阪、熊本、東京を巡り、議論を重ねた。

この３週間の学生会議での経験や出会いは大きな人生の転機だった。自分の意見を持つこと、そして大多数が賛成していても「それは本当か」と疑う勇気を学んだ。「なぜ日本の学生は批判しないのか」と会議の始まりで、アメリカの学生に何度も言われたが、自分で考え、時にはぶつかる勇気を徐々に得て、日米の学生が本音をぶつける議論を行うようになった。特に、熊本の平和学習では、被ばく体験を伝承する方々や高校生の話を聞いて、アメリカと日本の学生が率直に感じたこ
と、思ったことを意見交換する場が設けられた。

大人になると、国の立場や職業柄、本音を言えないこともあるが、ここでは、学生だからこそできる対話がある。異なる価値観に飛び込めば、不安を覚えることもあるが、彼らの生き方を知ることで、対話のあるべきカタチを私に教えてくれた。私は相手に寄り添い、本音で対話をする大切さという学びを活かして、世界の中でまだ気づかれていない課題を見つけ、その変化に携われる活動がしたいと思うようになった。

現在は、大学 2 年生になり、北海道のとある地域のまちづくりに携わり、チームで事業を立ち上げる準備に取り掛かっている。小さな行動かもしれないが、町の人々の声を聞き、本音の対話を通して、より良いまちづくりの在り方を町の人と共に考えていくことが今の自分の学びを最大限に活かせる場所だと信じている。まちのパンマルシェでは、個性を大切にするからこそ、いろんなパン屋さんがこの町では楽しめるのだと教えてもらった。ある夜は、居酒屋のカウンター席で子育てをするお母さんたちが、子育てで忙しくても「まごころ」のあるお店のおにぎりに支えられていると語ってくれた。
このように相手の背景や思いを知る本音の対話を重ね、彼らとの関係を深めていく中で、私は気づいた。平和とは、一人ひとりが日常を楽しく、幸せだと胸をはって言える状態が積み重なったものなのではないかと。つまり、それは「生きる」ということなのだ。小さな行動であっても、このまちづくりが、やがて地域や国を超えて、世界全体を豊かにしようという動きにつながると信じている。

平和は意外に私たちの身近な世界から広がっている。人それぞれが思い描く平和は違ってよく、その違いが、日常の小さなきっかけとなり、やがて世界を動かしていく。この気づきは、昨秋ミュンヘンで開催された One Young World Summit で出会った世界中

のイノベーターの人々との対話から得たものだ。これまで、世界を動かすイノベーターは何か大きな功績や成果を残す人だと考えていた。

しかし、イノベーションのきっかけは日常に潜んでいると彼らは言うのだ。例えば、誰もが農業を始められる環境作りに取り組んでいるセネガル出身のイノベーターは、「誰もが、自分のコミュニティ、そして世界に対して価値あるものを提供できる存在である」と語ってくれた。また、害悪とされる水草から環境に優しいプラスチックバッグを作るナイロビ出身のアンバサダーは、「恐れることは悪いことではない、最初から完璧な設計図を持っている人などいない」と教えてくれた。日常から、何かを変えたいと思ったときに、勇気を持って行動してみることが最も重要なのだと彼らから学んだ。

私は今も、「平和とは何か」という問いを、ウクライナでの経験を原点に考え続けている。しかし今、確かに言えることがある。平和への第一歩は、身の回りの誰かの日常を大切にしたいと願い、そこから小さくても行動を起こし、自分の意見を伝える勇気から始まるということだ。

私は、小学校の担任の先生が読んでくれた、谷川俊太郎の『生きる』という詩をよく思い出す。「生きているということ、いま生きているということ。それはのどがかわくということ、木もれ陽がまぶしいということ」という一節は、忘れかけていた「生きる」という感覚を、静かに呼び起こしてくれるからだ。

今の私にとっての平和とは、生きることそのものだ。生きることは当たり前のようで、決して当たり前ではない。だからこそ私は、これまでの平和活動や大学での法・国際政治の学びを通して見てきた世界を踏まえ、この足元にある「生きる」という尊さを、身近な地域から世界へ広げていきたい。そして、将来は、「生きる」の当たり前を守るため、対話だけではなく、制度や政策の側面で人々の日常を支える仕組みをつくっていきたい。

出典　谷川俊太郎『生きる』福音館書店、2017 年